かねてより、菱と死の問題は話し合っていたので、がんの状態がすこぶる末期と知り、迷わずがん治療はせず緩和ケアで残りの人生を過ごそうと決め、通院病院・大学病院の医師にもそれを伝え自宅療養を行いました。

最期まで自宅で過ごしたいとの妻の希望は、リンパ浮腫のために無理になり、82日間通院病院に入院しました。入院後の状態は妻の希望通りには行かなったとは思いますが、最期は、痛みを感ずることもなく静かな死を迎えることができました。

葬送の後、「妻は、もういないんだ」との思いがありましたが、妻を看取り終えたことへの安堵感と、妻へのねぎらいの気持ちが強かったです。正月過ぎになって数日間、誰とも一宮も口をきくことがないという状態でした。実は、低音感音性難聴のためTVを見るのも、電話をするのも不快でできなかったのも原因の一つです。妻の「お帰り」の声がないこと、何かし終わったとき「ご苦労様」の声がないことが寂しく感じました。また妻はもう美味しいものも食べられない、TVも見られない、行きたい所に行けない…それが可哀そうだなぁとの思いがありました。

葬儀の日も、その後暫くの間も妻の遺影の写真は用意しませんでした。写真を見ると妻が死んだような気がすると言ったら、娘が「だって死んだんじゃないの」と言っていました。1月中旬になって、49日法要で遺影の写真が必要と僧侶に言われ、結婚前に撮った笑顔の写真をアルバムの中で見つけ、それを遺影の写真として仏壇にも供えました。

近くの方々には妻の死を伝えていなかったので、以前と同じように毎日を過ごしました。一人でゆっくり自分の心の移り変わりを見つめ、49日法要が済んでやっとほっとした頃には一人の生活にも大分慣れました。「葬儀から半年間は誰にも知らせない」との妻との約束が終わり、6月16日に妻が生前色々お世話になった方に妻の死を伝え、その後何人かの友人にもメールで伝えました。12月16日に、霊園で一周忌の法要を行い一段落しました。

12月16日の最期の別れの少し前の面会の時、妻に「死んでもアンビ(家族の呼び名)は、ここにいるよ」と自分の左胸の辺りを叩いたら妻が頷きました。筆者は魂とか霊魂はあるとは思いませんが、何時も左胸に手を当てると、「あぁ、ここに居るなぁ」…との感じがします。不思議な思いです。ですから一人ぼっちという思いは余り無く、人生の同士がここに居るなぁという感じです。多分一般にはこれが魂とか霊魂と言われるものかも知れません。

魂や霊魂はあると思う人には有り、ないと思う人には無くて良いと思います。自分の心がそれによって、苦しみが癒され安寧が得られればそれで十分です。かけがいのない人を失ったとき、人は亡き人の魂の永続性を求めるのは自然です。魂の永続性を求めるとき、人は死後の世界を考え始めたのでしょう。やがて人は死の恐怖を実感するようになり、そのことが宗教の生まれる素地となったのかも知れません。

## 命の有限性の自覚と、生前葬の勧め

筆者の体験として、生前葬をしておいて良かったと思います。生前コンサートをされた小椋佳さんの出演したTV番組も見ました。私達夫婦は長い間、死生の話をしてきましたが、ある時生前葬の話が出て「じゃ、やろう」となり実施しました。

2011・2・1...二人だけで、お寿司を買ってきてビールで乾杯し、般若心経をテープで流しながら今迄の色々な思い出を語り合い、色々大変なこともあったけれど面白い人生だったねと、二人で頷き合いました。同年8月に、家族で夫婦の生前葬を行いました。

筆者は生前葬を済ませてからは、家を出る時、これが「別れの時」と思って家を後にしました。生前葬をするということは、人間の死が、事故・災害・病気等で突然やって来ることを自覚し、自分達がいつ死別するか分からないということを覚悟することです。

ご夫婦で急に生前葬をするのは無理かも知れませんが、生前葬を定年の頃(そろそろ認知症の心配がでる頃)の60~65歳位にすれば、人生の転換期として今迄の人生を振り返り、これからの人生を見直す良い機会になると思います。

夫婦でお互いの死の可能性を自覚すれば、平穏な今の大切さを理解し、お互いを大事なパートナーと思えるでしょう。二人が何時までも生きていると思うと、気に入らない事があったりすると、ついつい言い争い等をしてしまいがちです。言い争いをして出かけた先で事故に遭っ